

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	村津 蘭
論文題目	ベナンの霊的世界の変容をめぐる人類学的考察 —悪魔と対峙する新宗教を事例として—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、アフリカ・ベナン共和国に出現した新宗教「イエス・キリストの大聖教会 バナメーミッション (以下「バナメー教会」)」をめぐる現われる、霊的存在と人々とのかかわりについて考察したものである。</p> <p>まず序章では、呪術・妖術研究に関する災因論的説明、機能主義的説明、象徴的抵抗論といった先行研究が紹介される。バナメー教会は、悪魔払いや祈禱を重視する、いわゆる「ペンテコステ的教会」に分類されるが、その宗教実践を分析するには、先行研究の分析枠組みでは不十分であることが論じられる。そこで提示されるのが、本論文の中心となる、実践・身体・情動といった視座である。</p> <p>第1章では、ベナンの宗教的状況が整理される。当地域の在来宗教は、呪物を用い祖先霊や多数の神格を崇拝するヴォドゥンであるが、近年、民主化により宗教が多様化し、ペンテコステ的教会が急速に増加してきた。その背景には、従来のキリスト教系教会のモラルが低下し、呪術・妖術に対抗する力を持たないと信じられていることがあることが示される。</p> <p>第2章では、バナメー教会に関する記述がなされる。カトリックに起源を持つ当教会は、2009年に少女パーフェットに「神」が降臨したことで始まった。それ以後、他宗派を「悪魔・妖術師である」として攻撃するといった過激な教義によって勢力を伸ばしている。</p> <p>第3章では、バナメー教会における病気治療の過程が分析される。教会の信者は大半が女性であり、信仰を始めた理由は、病苦や家族関係のもつれなどが多い。そういった苦難の原因は、呪術と深く関連していることが確認される。そして、病気の治療過程では、信者の「情動の揺さぶり」が大きな作用を果たしていることが示される。</p> <p>第4章では、バナメー教会の重要な身体実践であるデリヴァランス (deliverance; 解放) の様子が詳細に記述される。「解放」の標的となるのは、信者に憑依した霊的存在であるが、それらはヴォドゥン信仰における「マミワタ」霊などだけでなく、従来は人に憑依する存在ではなかったはずの妖術師霊であることも多い。</p> <p>第5章では、デリヴァランスの中での憑依の状況が具体的に記述される。治療の過程では、治療者に接手された信者は、霊に憑依されて倒れることが多いが、そういった定型的な身体経験は、一種のスキルとして信者の中で育ち、身体化されていく。</p> <p>第6章では、バナメー教会信者の多くが信仰の理由として挙げる、「病が治癒した」</p>			

という経験が分析される。まず、ベナンにおける生物医療と病の観念が整理された後、バナー教会における治癒が、信者の身体感覚が教会の提供する数多くのモノや環境に媒介されて揺さぶられることによって起こっている状況が示される。

第7章は、ある信者の家族において生じた、妖術師の憑依に関する短編映画が充てられている。憑依の状況を視覚的・聴覚的に示すことにより、言語化未満の「情動」が、映像という形で感覚的な民族誌として提示されている。

終章では、ここまでの記述・分析を踏まえ、ベナンにおける宗教的世界の現状について議論されている。都市化・個人化・宗教の多様化といった現代の状況に対して無力な既存宗教への失望が、バナー教会の隆盛につながった。バナー教会には、病を得た信者の情動に強く働きかけ、その感覚を身体の外へ向けさせることによって病を治癒させるというプロセスが存在した。この過程において、妖術師という存在は、注意を外へ向けるという意味で、邪悪なものというよりはむしろ「病を治す」存在として捉えられるということが示唆された。

(論文審査の結果の要旨)

「近代化が進むにつれて人間は呪術から解放される」というマックス・ウェーバーの言葉とは裏腹に、現代のアフリカにおいては、呪術・妖術をめぐる言説や行為はますます盛んになっている。そのような状況のなか、申請者・村津氏は、青年海外協力隊の活動を通してベナンの宗教的状况に関心を抱き、本研究科においてそれをより深く探究するため、当地で興隆する新宗教「イエス・キリストの大聖教会 バナメーミッション (以下「バナメー教会」)」の調査をおこなうこととなった。

その成果である本論文のもつ意義は、以下の三点にまとめられる。

第一に、アフリカにおける宗教の最新状況を、的確に記述したことである。アフリカでは、それぞれの地域の伝統宗教に加え、植民地期より布教されてきたキリスト教が信仰されてきた。1960年代の独立期以降は、キリスト教のアフリカ化が進行したが、近年はアメリカに起源するペンテコステ派に近い教義をもつ「ペンテコステ的教会 Pentecostal church」が勢力を伸ばしている。これらの教会は、聖霊降臨、病気の癒し、悪霊の追い出し等を重視するという特徴をもち、バナメー教会もその一翼を担っている。当教会が特異なのは、パーフェットという少女に「神そのものが降臨した」というその中心教義である。またバナメー教会は現在、悪霊の追い出しなどの活動だけでなく、「〇〇宗派は悪魔化している」といった形で他宗派を激しく攻撃することによって勢力を伸ばしている。村津氏はこういった状況を、長期にわたる参与観察によって詳細に記述することに成功している。

第二に、バナメー教会をめぐる生起しているできごとを「真剣に捉える take seriously」ための方法論を見出そうとしている点である。もちろん多くの人類学者は、現地のできごとを真剣に捉えようと努力しているわけだが、しかしそこで捉えた感覚はしばしば、分析と記述の段階で、いわば認識論的に切り捨てられてしまうのである。たとえば申請者は、ケニア・ドゥルマの妖術に関する浜本の分析を「妖術解釈が言語モデルへと縮減されてしまっており、言葉になる前の情動や身体反応は捨象されている」と批判している。それに対して本論文では、情動を情動のまま提示することが試みられる。その手法は、一つには、信者たちの体験を、申請者自らも巻き込んだ形で厚く記述することである。もう一つは、申請者が長年携わってきた民族誌映画という手法を用いることであり、本論文では、第7章の大半が「妖術師の声」と題する短編映画で構成されている。こういった形で、人類学の記述方法の革新が試みられている。

第三に、人類学において長い歴史を持つ呪術・妖術研究に、理論的な新生面を開いたことである。本研究では、バナメー教会においておこなわれるデリヴァランス (deliverance; 解放) と呼ばれる実践などの宗教的行為が分析されるが、そこでは、儀礼において交わされる言葉のみならず、その場で用いられるさまざまなモノやそのマテ

リアリティ、そして身体の相互のかかわりあいの中で信者の情動が揺さぶられていくさまが記述されている。このような、さまざまなアクターを対等な立場で扱っていく手法は、呪術・妖術現象を存在論的に捉えるという方向性を示している。また申請者は、情動の揺さぶりの中で、信者の抱える病への注意が身体の内側から外側へと向け変えられ、それが治癒へとつながっていくことを明らかにした。申請者は、呪術・妖術が、そういった向け変えの契機として「治癒を引き起こす」存在となっているという新しい見方を提示している。

以上のように、本論文は、長期にわたる綿密な現地調査を基盤として、アフリカにおける宗教研究に新たな展開をもたらす意欲的な地域研究として高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年1月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。